

る試みとしては實に立派なものです。」

彼が自分の質問に答へて「知らない」とか「斷言出来ない」とか云つて呉れるのが嬉しかった。却つてその爲に彼に惹付けられた、如何にも此の人は正直だと思つたから。苟も先生が自己の無智を告白する丈の元氣を有つて居れば、屹度其の人は自己の知識に自信のある人に違ひない。實際ミクハイロは自分の全然知らないことを澤山知つて居つて、其れを實に簡潔に話して呉れた。太陽や星や地球の構成について話して呉れた時などは、如何にも彼れ自身が此の全智全能の手になつた萬物創造の大業に親しく參加して、萬事を目撃したやうであつた。

自分は神に對する思想に於て彼に信服することは出来なかつたが、別段それが自分を苦しめる程ではなかつた。彼が世界の原動力を物質といへば、自分は心の中で神を以て物質に代へた、萬事都合よくいつた。

「神は」と笑ひながら彼が云つた、「まだ創造されないのだ。」

神の存在といふ問題は何時もミクハイロと伯父さんとの口論の原因であつたので、ミクハイロが「神」といふ言葉を口走ると、屹度ピーターは憤つて斯んなことを叫んだものだ。

「また始まつたな、此奴の云ふ事を信じちや可かんよマトヴさん、此奴は母親の遺傳を受けて居るのだ。」

「然し伯父さん、マトヴさんにはまだ神が重大な疑問なんだよ。」

「嘘を吐くな、ミクハイロ！ 神なんてものはありやしない、宗教でも教會でも、其の他これに關するものは皆泥棒の栖んで居る眞暗な森に過ぎないんだ、嘘の塊だ！」

然しミクハイロは黙つては居なかつた。

「私の所謂神は、人間が各自の存在の暗黒を照す爲にその心で創造する時、初めて存在するのだ。然し人間が主従に岐れ、支離滅裂となり、その思想と意志とが分裂するに至つたので、神は生命を失ひ、遂に死んで了つた。」

『あれを聞いたかマトヴさん。』とピーターは嬉しさに叫んだ。『神は死んだのだ。』  
然し甥はその顔を屹と見詰めて、聲を低くして云つた。

『現世の君主等の最も大きい罪惡は、民衆の創造力を亡ぼして了つたことだ、然し何時かもう一度、民衆の意志は舉つて唯一の目的に向けらるゝ時期が到來する。其の時こそ民衆の征服し難い不可思議な力は、再び勃興して神も亦復活する。而してそれは貴方が求めて居る神なんだ。ねえマトヴさん！』

ピーターは樵夫のやうに手を動かして、

『彼の云ふ事を信じちやいかんよ、マトヴさん！ 嘘をいつてるんだ！』

と云つて今度は甥の方を向いて怒り狂つた。

『貴様、労働者に現在を改善してゆく使命があると云ふのならば——宜しい、改善して見るがいゝ、而して僧侶達が自分等の巢窟へ持つて行つて埋めてるやうな屑なんどを擔ぎ出して氣を揉むな。』

自分は此の人達の會話を非常に興味を有つて聞いた。而して彼等が相互に眞面目にやつて居るのに驚かされた、どんなに熱心に議論をしても決して互に嘲弄や侮辱めいた態度には出なかつた。伯父さんのピーターは折々興奮して身を震はしたり、血が頭に上つたりしたが、ミクハイロは只その頭を下げた、そして恰當此の大敵に背負投を喰はしたやうであつた。此の兩人が自分の前で過激な論争を行つて居るのを見た。二人とも神を否定して居りながら、而かも眞正な信仰に満ちて居るのであつた。

『そして、今、自分の信仰は何うなんだらう？』と自分は自身に問ふて見たが、應へることが出来なかつた。

自分が斯ういふやうにミクハイロと一緒に居る間、神と、そして、人間に關する神の地位といふことに就いての自分の思想が衰へて、云はゞ其の思想の力と以前の反抗力を失つたので、それがまた無數の新思想によつて愈々弱められた。而して『神は何處に居るのか。』と云ふ代りに『我とは何ぞや。』とか『何故我は存在するか。』とか『我

は只神を追究する爲にのみ生くるものか。』といふやうな新らしい疑問が不意に萌して来た。

自分は莫迦げきつてゐるといふことを知つた。

夜になると何時も労働者連がミクハイロの家へやつて来て面白い會話が出て来る。校長は現世のことを話し、その法律のよくない所を彼等に説明した。此の人は法律に精通して居たから。如何にすれば解り易く説明が出来るかをよく理解して居た。この労働者等は竄の火で皺がより、陰鬱な顔をして眼は生活に疲れ、皮膚は煤烟で黒ずんで居る青年達であつた。皆怖ろしく熱誠な人達で深い沈黙の中に、顔を盛めて聽いて居た。最初自分は、嫌に氣難かしい陰鬱な内氣な人達だと思つたが、後になつて、彼等は歌も唄へば舞踏もやり、短い休みの間には、娘達にも調弄ふのだと云ふことを知つた。

ミクハイロとこの伯父との對話は大概同じ題目であつた。金力だとか、労働者の壓

迫だとか、雇主の貪欲だとか、階級制度を破壊するの急務など、と云ふやうなことであつた。自分は労働者でも雇主でもなく、資本も有たなければ、何か仕事を得たいとも思つてゐないから、こんな對話に特別の興味を有たなかつた。自分には此れ等の人々が餘り資本に重きを置き過ぎて却つて自らを卑めるものだとさへ思はれた。自分は再三ミクハイロと議論をしては人間は先づ靈の國を見出さなければならぬ。然うすれば地上にも適當な場所が見付かり、自由を發見し得ると云ふことを納得させやうと努めた、自分は暫らく熱誠を置めて話した。すると労働者連は公明正大な裁判官のやうに、自分の話を機嫌よく注意して聽いた呉れた。年寄株までも自分に賛成して呉れた。自分が話し終ると、ミクハイロが微笑を湛へながら應答を初め、自分の議論を全然打毀して了つた。

『私もあなたの云ふことは正しいと思ふよマトヴさん、若し人間が神秘に取巻かれて生活し、神——人間の心靈——が自己の味方だか敵だか解らないと云ふのなればです

ね。然し吾々奴隸——毎日勞苦の重い鎖で繋がれて居る吾々——が、この吾々の押籠められて居る獄屋を破壊しないでも、貪欲の束縛から免がれることが出来ることと云ふのならば、それは間違つてる。何はさて置き、吾々は自分達の最も悪い敵の力を認め、どうしたらばその謀計を看破し得るかを知らなければならぬのだ。だから互に意志を疏通して、各自人間に共通の要素を發見する事が何よりも大切なのだ、此の要素こそ吾々の征服し難い力で、奇蹟をも演出すことの出来る力なのだ。奴隸には決して神がない、然し只外部から彼等を強制する人間の法律が、神位に上せられてゐる、奴隸に神はあり得べからざるものなのだ、神とは各自がその同僚と共有する靈的同類と云ふことを充分に意識する所から産れるものなのだから。殿堂は砂利や瓦礫では建てられないが、堅牢な石塊で建てられるのだ。孤獨と云ふのは個人が同種族の全體から分離することなので、心靈上の無能と盲目との標徴なのだ。然るにあなたは其處に不滅を見て居る、然し孤獨には、奴隸と暗黒、遣る瀬ない憂鬱と死とがある許りだ。』

ミクハイロが斯う云つてる時、其の眼は遠方に或る偉大な光明を認めて居るやうに思はれた、彼は自分を他界に惹き入れて了つた、誰も彼も皆恍然として彼を疑視めてゐたので、自分は忘れられてゐた。

最初自分はこれが癩に障つた。自分の思想は不評判で、誰もミクハイロの思想のやうに熱中して呉れないことを想像した。

時々自分は知られないやうに座を外し、隅の方に陣取つて自分の高慢心と問答したので。

自分は學校の兒童と親しくなつた。休日になると、彼等はピーター伯父さんと自分の許へ、一束の穀物に集つて来る雀のやうに群つて來た。伯父さんが色々な玩具を拵へてやる間、子供等はキイエグやモスカウのこと、其の外自分が實際にこれまで見たことを訊くのであつた。然し屢々自分に驚愕の眼を睜らしむるやうな意外の質問をするものもあつた。

此の中にフエギアと云ふ静かな真面目な少年が居た。一日自分が此の少年と森の中を散歩しながら、キリストのことを話して居ると、少年は不意に真摯具つた聲で自分の言葉を遮つた。

『何故キリストは一生涯子供——私位な年頃——で居なかつたのでせう、そして矢張り金持を叱つたり、貧乏人を助けたりして居たならば、少いんだから磔刑にならなかつたでせうにねえ、人々はキリストを憫然に思つたでせうにねえ、大人になつたから、みなが殺したんだ、それぢや生れて來なかつたも同様だあ。』

フエギアは十一歳だつた、蒼白い透貫るやうな顔で、何だか油斷の出來ないやうな眼付をして居つた。

今一人、學校で最下級に居るマークと云ふ少年は、細そりした、手に負へない腕白者で、始終酔拂つてる、大の亂暴漢で、喧嘩好であつた。何時も徐かに口笛を吹きながら、他の子供等を抓つたり、張り飛ばしたり、衝き倒したりして居た。或時此の少

年が柔順い少年を涙ぐむまで苛めて居たのを、今も自分は眼に見るやうだ。

『だけど、マーク、撲り返されたら如何する?』と自分は云つた。

マークは自分を疑と見て笑ひながら答へた。

『なに、彼は撲り返さないよ、其れあ善い温順しい奴なんだからそんなことは怪我にもしません。』

『では、何故お前は彼を苛めるんだい?』

『丁度其の理由で。』

と少時口笛を吹いてから、附加した。

『そして又彼は非常に温順いんだから。』

『あゝ、それも一つの理由なんだね、もう外にないかね。』と自分は訊いた。

『温順い人間と云ふ外に理由なんかあるもんですか。』

彼は非常に落着いて斯う云つた、未だ僅か十二歳だけでも、温順い人間なんてもの

は只だ侮辱され迫害されるやうに創られたものだと言ふことを信じて疑はなかつた。此等の少年はみな各自我流の哲學者だつた。自分が少年等に近いて、研究して見ると、彼等の運命が屢々考へられた。何故子供等までが苦しい残酷な人生を、前途に受けなければならぬのだらう？

自分はクリスチナと自分の悴とのことを考へて居ると、突如、ある厭な思想が自分の心を襲つて來た。

『汝が女に自己の歡樂の子を産むことを禁ずる理由は、多分汝に敵意のある危険な者が産るゝかも知れないと言ふことを怖れるからだらう。自由戀愛で胎んだ悴が、汝から獨立しやしないかと云ふ恐怖から、女の意志を束縛するのだらう。畢竟、汝は自分が教育して生存競争の適者たらしめんとして居る自分の子供等を、盲目にする權利を有つてゐるかは知らないが、併し汝は私生兒が執念深い敵となることを怖れて居るのだ。』

此の工場にも斯んな私生兒が一人居た、ステフエンと云つて、甲虫のやうに眞黒で、痘痕面で眉毛がないが、才智の秀でた快活な少年だつた。

初めて相識になつた時、彼は自分の側へやつて來て斯う云つた。

『出家さま、あなたも私生兒だといふことを聞きましたか、私も然うなんですよ。』  
そして、自分にもつと近寄つて來た。彼は十三で既に學校を卒業して工場に働いて居た。

『では、地球は非常に大きなものなんですか。』と彼は云つた。

自分は出来る限り精細い知識を與へてやつた。

『何故、お前それを知りたいのか。』と自分は云つた。

『あゝ、私は何時までも一つの場所に蹲つた居たくないんです、私は樹ちやありません、私は鍛冶屋の職を覺えて了つたら、露西亞中を放浪する積りなんです、モスカウまでも、もつと遠くまでも、行つて見たいんです。』

そして誰かを強迫でもしてるやうに言ひだした。

『然うだ、私は往くんだ。』

自分は彼を仔細に観察して見たが、彼は少年達を眞摯な問題に惹入れ、ミクハイロの友達が集會を催はす場所に、喜んで停まつた。

此の少年には特に莫迦げた徒戯をする癖があつた。殊に工場に關係のある人々を見張つてゐて、よく種々な悪作をやつた、また道具を隠したり、壊したり、機械に砂を撒いたりしたものだ。

或日晝餐頃彼は自分に斯う云つた。

『出家さま、眞個にこゝは嫌な所ですね。』

『それは如何してか。』と自分が云ふと、

『私は知りませんが、こゝの人達は眞個に慘憺な生活をして居ます、勞働と憂慮と——其外には何もありません、私は年期さへ明けたら去つて了ふんです——直に。』

彼が未來の放浪のことを話す時には、眼を丸く開いて大膽に前方を見て居た、其の顔には自己の力の外の何物をも信用せぬといつた征服者の容姿があつた。自分は此等の子供等に愉快を覚え、其の談話の中に、何處かに成人びた所を感じた。

『彼は失敗はしないだらう。』と、自分が少年を凝つと見た時に然う思つた。而して自分の悴を懐かしく思つた。どんな風をして居るだらう、どんなに生活してるだらう、それを自分は見たいと思つた。

## 二十五

自分は全く新しい情操が湧いて來るのを感じ初めた——恰當立派な鋭い光線が各自から自分の上に集り、目に見えぬやうに自分に觸れ、氣がつかないやうに自分の心情を動かしたやうであつた。自分は段々明かに、快く喜ばしく此の光線を感じずるやうになつた。

労働者達は屢々ミックハイロの家に集つた。此の人達の會話は暖い雲に凝結して、自分を取り圍み、恰當自分を自分以上に持運ぶやうに思はれた。そして俄に人々が稍自分を了解し初めて來た。自分は一座の中央に起つたのである、言はゞ此の人等が自分の身體を構成した。其の刹那、自分は此の人達の心靈であり、意志であつた。また自分の談話は彼等の聲であつた。自分は恰當一個の偉大なる身體の一部分として棲息して居るやうであつた。自分自身の心靈の叫びを、他の人々の唇から聴くやうであつた。それを聴いて居る間は、幸福であつたが、やがて其の瞬間が過ぎ去ると直に、其の聲も亦沈黙して了つて、以前の一人になつた——全く只一人に。

自分は祈禱の裡に、神との一致を發見した時のことを、想ひ出した。その頃、自分の心は恍惚となつて、自分といふものが、自我の意識から消失せて、存在しないやうであつたのだ、然し此處では、自分は人々と交際して、自分と云ふものを、棄てないで、却つて漸々自分を自分以上に擧げ、精神の力が加はつて來た。然し此處に忘我と

いふことはあつた——それは自分を非難しなかつたが、自分の苦しい思想と、孤獨に依つて生ずる不安とを鎮める丈のものであつた。

この新らしい氣持の萌したといふ自覺が不分明と心に起つた。何か新しい種子が心靈の中に芽を萌いて來るのを感じたが、それでもよく理解することが出來なかつた。只それが自分を漸次強く確乎と人道に惹きつけるのに氣がついた。

當時、自分は工場で一日四十コペツクの賃銀で働いてゐた。種々な重い荷物を肩に擔いだり、鐵滓や、煉瓦や、鑄物を満載した重い車輛を押したりした。自分はこの汚物、絶間なき叫喚、機械の轟き、蒸すやうな熱さで、地獄のやうな此の場所が、嫌で堪らなかつた。

この工場は大地を吸い込んで、それを窒息させた。そして晝となく夜となく、貪慾にも呻き叫んで、大地の燃ゆる血を飽くことなく甜めて、それを炎々たる咽喉から吐嘔して居たのだ。屢々工場は寒く暗くなつたが、直に熔解ける新しい材料を得て、雷



鳴のやうな轟響がまた初まり、火花を散らして、赫い鐵を鍛へ、地球の洞内を通つて居る血管のやうな、溶けた鐵の長い線にした。

この薄氣味の悪い仕事に、何か怖ろしい氣狂じみたものがあつたやうに思はれた。地球の胸奥を荒す、哮り狂つてゐる妖怪は、脚下に深い淵を掘つて、激怒に充ちた百千の聲で叫んで居る——いつかは其の中へ墜ちる事を知つて。

『早く、早く、もつと早く。』

火焰の白熱の中に、喧騒の中に、雨と降る火花の中に、勞働して居る人達は煤煙で眞黒になつてゐた。どちみち彼等は調和を得て居ないやうに思はれた、そして全く火焰の中に焼け死に、鐵の重荷で粉碎されはせぬかと威嚇されてゐたから。有らゆるものがみな彼等を盲目にし、聾にしやうとして居た。而して堪へられない火熱はその血をも涸らし兼ねまじい有様であつた。而かも人々は沈着に働き、何ものをも恐れず、何事をも心得て、地獄の惡魔のやうに、熟慮と確信を以て動き廻つて居た。

勞働者等は屈強な腕で槓杆を扱つた。凡て其の周圍の人々の頭上には、恐ろしげに、而も從順しく、鐵をも噛み砕く暴戾な機械の、腮や爪牙が動いて居た。其處に誰の精神誰の意志が、勢力があつたのか分らない。或時は人間がその掌中に手綱を握つて、思ふ存分にこの恐るべき妖怪の全部を指揮して居るやうにも思はれた。然し或時は凡て人間も、器械も、また全體の工場も、地獄の王サタンに支配され、そして世にも恐ろしい勝ち誇つた世笑の霹靂を以て、人間の貪慾を喜ばす此の氣狂はしき苦しい渦巻を、凝と見詰めて居るではないかとも思はれた。

『はあ！ もう仕事に着手する時刻だ。』と勞働者が相互に云つてゐるのが聞えた。

自分は、人間が仕事よりも上位に居るのか、それとも仕事人間を奴隷扱ひに服従させて居るのか斷言し兼ねた。仕事は難しい骨の折れるものであつたが、然し人間の智力も亦鋭敏、精巧なものである。

折々この地獄の渦巻と機械の轟聲の中に、樂しげな歌が勝鬨のやうに無頓着に鳴響

くこともあつた。自分は獨り微笑んで、かの怪鳥フェニックスを捕へる爲め、鯨に乗つて天上したと云ふ馬鹿シヨンのことを考へた。

この工場の労働者は皆岩疊な、無骨な、大膽者許りであつた。よし悪口を云つたり呪つたり、卑猥な話をしたり、又屢々泥酔しても、尙大體に於て一つの獨立した、物に動ぜぬ階級を成つて居た。かの臆病や、悔恨や、絶望乃至俗事や精神上に關する充らない不正直で以て、始終自分を憤らして居た厄難な巡禮や、田夫野人とは全然異つて居た。

工場の労働者は或る大膽な思想を有つてゐた。殘忍な労働に苦しみ、仲間同志が爭論したり、撲合つたりしてゐても、雇主の方で不正な行動に出るやうな時には、直に結合して一人の人間のやうになつたものだ。

然し、ミクハイロの家にやつて來た少年達がいづも牛耳を取り、他の人々よりも大聲に話して、何事にも怖ぢなかつた。以前自分が、此等の人々の事を考へるまで、彼

等を個人として、注意しなかつたのだが、今自分はよく觀察して其人々の間に、個性の相異を發見して、自分の眼に、各自の個性が判然と際だつて見えるやうにしやうとした。而して自分は或る程度までこれに成功した。その會話振りなり、顔容はみな異つてゐたが、その信條と、心理的の傾向に至つては皆同一であつた。彼等は熱心に歩調を合し、而も急がず、騒がず、何か新らしいものを建設して効果を收めやうとしてゐた。

彼等は各自此の工場の職工達の間にて、一の光明であつた。暗い森の中にある通路が、道に迷つた流浪者に於けると同じに、その一人が現はれて來るのは嬉しがられてゐたのだ。此の人々は、他の労働者共、殊に聰明いものを惹つけてゐた。そして皆ミクハイロを圍繞いて會合し、こゝに知識上の選良の團を造り、快活に輝く思想の爐を形成つて居た。

最初彼等は自分を素氣なく迎へた、そして大きな聲で叫んで、自分の言ふことを妨

げたり、嘲笑したりした。

『は、赤毛の蠅め、僧院の南京蟲、浮浪人、食客！』

屢々労働者の一人が自分を撲りに來ることさへあつた。そんな時には自分も堪らなくなつて、鐵拳で張り飛ばしてやつた。然し腕力が吾々を満足させても、拳固によつて尊敬や注意を強ふる事は出來ない。若しミクハイロの親友のガヴリロ・コスチンが仲裁しなかつたならば、恐らくは、もつと鐵拳を食はされたであらう。コスチンはまだ若い馬鹿に綺麗な鑄物師で、工場では却々勢力があつた。

半打許り顔容の物騒な奴が自分に突つ掛つて來たが、コスチンは自分の所へやつて來て斯ういつた。

『おい、貴公達、何故、此の人をそんなに迫害するんだ、あの人だつて俺等と同じやうに善良な労働者ぢやないか、貴公達は不正な行爲をして自身を害つて居るのだ。俺等はお互に親密な友情を保つてこそ、力があるんぢやないか……』

彼は僅か此の數語を語つた許りではあつたが、それが子供等に話してゐるやうな親切な撲直な調子であつた。ミクハイロの友人はみなあらゆる機會を利用して、此の先生の教理を宣傳しやうとした。自分の敵手もコスチンの忠告に耻ぢ入り、自分までも感動の餘りまた斯う云ひ出したのであつた。

『自分は腹一杯食ふ爲に僧侶になつたのぢやない、然し自分の心靈が飢えて居たからだ。自分は獨りて生活した。そして至る所、骨の折れる荒い仕事と、間斷なしの飢渴とを見ただけだつた。何處も彼處も、詐欺と掠奪、不運と涙、殘酷と絶望だ。誰かこれを創つたか、何處に賢明で公平な神は居給ふか、神は自分で創つた人類の永遠無限の苦痛を見て居るのか。』

少數の人々は集つて來て自分の言ふことに耳を傾けた。自分が話して了つても、人は黙つて残つてゐた、すると老耄したクリアウコフはコスチンにかう云つた。

『此の出家さんは事物をお前さん達とはもつと深く考へてる。何うだ彼が事物の根本

を掴まうとしてるのが分らんかい。』

自分はこの話を聞いて嬉しかった。クリアウエフは自分の肩を、たと打つて云つた。

『もつと話し給へ！ 君の云ふことは至極尤もだ、然しそれより一寸往つて頭髪を一  
エルに切つて來給へ、そんなに長髪にしてゐると塵埃が粘いて、笑はれるよ。』  
誰かおどけて大きな聲で叫んだ。

『それに喧嘩をする時に邪魔にならないかね、君！』

人々はおどけた。で、その不機嫌が消え失せて了つた。誰でも笑へばその心が外面  
に現はれて來る残忍な悪漢は決して笑へない。

コスチンは自分を側へ伴れて行つた。

『マトヴさん、あんな言を云はないやうにし給へ。』彼は云つた。

『彼奴等が直に禁錮にするかも知れないから。』

『何ですか。』と自分は駭いて云つた。

『然らさ、禁錮さ。』彼は笑ひながら云ふのであつた。『解らないから。』

『何うしてですか。』

『それや、餘り嚴酷な批評だから。』

『笑話でせう！』

『ミクハイロに訊いて御覽なさい。』彼は云つた。『俺は仕事に行かなければなりません。』

而して彼は去つて了つた。

## 二十六

コスチンの言葉は少からず自分を驚かした。自分はそれを信じたくはなかつた。が、  
其の晩ミクハイロはそれが眞實なことを斷言した。其の夜中、彼は自分のやつたやう  
な談話の爲に受けた残酷な迫害や、死刑にさへ處せられたことなどを話した。其の他

同じやうな理由で數千の人々がシベリヤへ苦役にやられたことや、ヘロデ王の虐殺は絶えずして、却つて數の上に於ては殖えたが、この教理に心服する人々は密に數を増して行つたことを物語つた。

その時、從來に見聞したことは、悉く自分の精神に明かな光明を放ち、ミクハイロと其の仲間の労働者との會話が、一々新しい意義を有つやうになつて來た。苟も人間がその信念のために自由と生命とを棄てんとする時は、その信仰は極めて眞面目で、正しくキリスト教の殉教者と同等なものと思ふ。

當時、ミクハイロの凡ての言葉は、結合した一體となり、言はゞ美しい花と咲いてその瞬間に自分自身の心靈の一部分になつたのである。

自分はミクハイロの言葉を一も二もなく、彼が用ゐた其の儘の意味で捉へて、それを直に自分の精神上の所有にしたとは云はない。然しその晩に自分は初めて、彼等がどれ位、自分の心靈に接近してゐるかを知つた。その時、この全世界は子供の無邪氣であつた——

な血で浸された只一つのベツレヘムのやうに思はれた。その時、自分は、地獄を見て聖ミケエールに歎願した聖母マリアの燃ゆるやうな願望を理解した。その歎願はかうであつた——

『おゝ天使の長よ、私に此の火の中で、少時、辛棒さして下さい、また此の怖ろしい苦惱をも分けて下さい。』

此處には罪の人は獨りも居なかつた、みな此世にある地獄を破壊しようとしてゐる正しい人ばかりであつた——その目的のために、彼等はあらゆる苦惱を甘んじて受けようとしてゐた。

『多分。』と自分はミクハイロに云つた。『今、神聖な隠者のゐないのは、人々が現世を遁げないで、却つてそれに這入り込むからではないでせうか。』

『眞正な信仰は活動の絶對の源泉らし。』と彼は答へた。

『では、自分にこの仕事の仲間入りをさして下さい。』と自分は云つた。

『さ、え。』と彼は云つた。『少時待つてよく考へてご覧なさい。貴方はまだそれ程に成熟してゐない。若しその性質で、今敵の勞働に従事するならば、貴方は永久に敵手の所となつて、何の役にも立たなくなつて了ふ。こんな會話をしたならば、反つて、此處を逃げ出す筈なんだ。貴方の精神はまだ充分に定つてゐない、まだ吾々と共に働くだけ充分に解放されてないです。多分吾々の仕事に魅せられてゐるのでせう。つまりその美と壯大が眼前に強く展開されたから、貴方は多分それに動かされてゐるのでせう。つまり、貴方は今建築ざれつゝある場所に起つてゐるので、其處に、その宏大絢爛な光榮ある殿堂を夢みて居るのでせうが、全體の設計をも精密に知らないで、つまらぬ普通の仕事を企てやうとすると、殿堂の輪廓は目から消え去つて、架空の繪圖は心に印せられずに褪めて了ひ、卑近な日常の仕事も貴方の能力には不適當に思はれるやうになるてせう。』

『あなたは、何故、自分の情熱に冷水を浴びせるのです？』自分は悲しくなつて云つ

た。『自分は人生に一つの住處を發見けたのです。自分は有用なものと認められたのをひどく欣んでゐたんですが……』

然し彼は重々しい静かな調子で云つた。

『私は、貴方が、自身に全然明確でない計畫に依て生活し得る人だとは思つてゐない。勞働階級の精神と貴方の精神との密接なる關係の意識が、まだ充分に心靈に徹底して居ないことを私は認めて居る。私の目には、今の處、貴方は生の壓迫で研きなされた賤民の思想の進歩した代表者だ。然し、貴方はかう云ふ風に自らを解釋しないで、自分分は矢張り貧民の爲に餘力を投ずる英雄なのだと思つてゐるのです。貴方の眼には自身は何か人並外れて、只だ自身のために生存してゐるやうに見える。貴方は始元であつて、又終末である、美しい莊重な無限の單なる連續ではないのだ。』

何故、彼が自分を努めて冷罵しようとして居るか、解り出して來た。そして彼が云ふ所のもの、中に、漠然たる眞理を感じた。

『貴方はまた放浪を始めなければならん。』と彼は云つた。『新しい眼で以て民衆の生活を觀察する爲に。書物は多くを教へて呉れませぬ。讀書からは大した利益は得られぬ。』現に貴方は人間の知識は書物に藏められてないことを認めてゐる、自由に對する賤民の精神の絶對的努力は、無限に異つた方法で現はれてゐるから。書物は貴方を願使しようとするのでなく、貴方を解放するための武器を提供するのだが、貴方はその武器すら使用する術を知らないんです。』

彼は眞理を語つた。自分は書物のことは全く知らなかつた。宗教上の書物のみ讀み慣れて居たので、俗界の思想を理解するには骨が折れた。口で話される言葉は印刷されたものよりか、よく意味が解つた。書物から拾ひ集めた思想は心の表面に残つてゐるので、直ぐに火に熔けて消えて了つた、加之、自分の惑つてゐる主要な問題、神は如何なる法律に従ふべきか、神は勝手に自分を創つて置きながら、何故、自分の意志に反して、自分を侮辱するか、そして神の意志は特にどんなものであるか——に

關しては何の應答もして呉れなかつた。

その外に、なほ、第二の問題が自分の心に在つた、それは第一の問題と反對のものではなかつた。——つまり、神は實際に地上に降臨したか、神は人間の力で天に上つたか。この問題から、民衆——集合體としての——の永久の仕事として、神の創造と云ふ重大な問題が起つた。

自分の心情は二つに裂けた。自分はこれ等の人々と一緒に居たかつたが、一方にまた、自分の新しい思想を試みるため、そして自分の自由を奪ひ、心靈を悩ました未知の思想を求むるために、此處を去りたいと思つた。

ピーター小父さんも去るやうに忠告してくれた。

『マトヴさん、お前さんは少時の間、此處を去らなければならん。お前さんの云つたことについて、危険な噂が擴つて居るから。』

直に萬事が決定された、云はゞ自分の希望に反して。

一夜、馬に乗つた使者が、近隣の工場から来て、巡査が戸毎に巡回し、此處に來よ  
うとしてゐると云ふ報知を齎らした。

『あゝ、彼奴等は恐しく遽て、やつて來たんだな。』とミクハイロは憤つて言つた。

すると、みなものが、どつと驚き逃げ出した。ピーター小父さんは自分に叫んだ。  
『おゝ、マトヴさん、おい、もうお前さんは此處に用はないんだ、お前さんに關係の  
ないことに係はる必要は何にもない。』

そしてミクハイロは強く自分を急立て、自分の顔をじつと凝視て、かう云つた。

『マトヴさん！行つて了つた方がいゝ。貴方が此處に居たとて何の益にも立たない、  
却つて悪いことが出来る許りだから。』

自分はこの人々が自分を逃がしたいと思つてゐることを感じて氣持を悪くした。が、  
同時に巡査を恐いと思つた。自分は巡査を見なかつたが、それでも巡査が恐かつた。  
危険に瀕して、人々を捨て、行くことは卑しむべきこと、知つて居たが、それでもそ

の人々の希望に従つた。

然しこの人々は自分を一人て出發させなかつた。

自分は森の方の山に登つた。すると恰當誰か、自分の踵を擱へたやうに、切株の間  
の下生の中に躓き倒れた。自分の後方にはイワン・ヴィコヴと云ふ寡言な青年が、大  
きな荷物を肩に擔つて跟いて來た——この青年は多くの書物を森林の中に隠すのであ  
つた。

兩人は森の端まで一緒に行つた。そこに彼は隠し場所を發見け、その中に荷物を藏  
めた。それが實に沈着いたものであつた。自分は陰鬱な氣分になつて彼に云つた。

『此處へは彼等奴は來ないだらうか。』

『そんなことが解るもんですか。』と彼は云つた。『多分此處へだつて來るてせうよ。大  
急ぎでやらねばなりません。』

この青年は樫の木株を斧で伐つたやうに肥つてゐた。その頭は素敵に大きく、一方



の肩が他の肩よりも高く聳えて居た。その腕は不均合に長く、聲は荒々しかった。  
『お前さんは怖くはないか。』と自分は訊いた。

『何故、怖いんです？』

『彼奴等が来て、お前さんを連れて行きやしないかと云ふことがさ。』

『若し』——書物を指しながら——『彼等奴があれさへ発見なけりや、何うだつて可  
いす。』

この青年は一々氣を配つて、何もかも、此穴の中に入れ、その上に土を被せて平に  
し、地面に腰を下して、自分が早く行きたがつてるなと云つた風に、かう云つた。

『ちよつとお待ちなさい、誰か切符を持つて來ますから。』

『何の切符を。』

『知りません。』

自分は谷間にある樹の間から、絞殺されかけてゐる強い人間のやうに、呻めいてゐ

る工場を見た。それは恰當人間が闇黒な街道で、相互に追ひつ、追はれつして、争鬭  
を始め、怒り狂つて、骨を碎き合つてゐるかのやうに思はれた。イワンが山を下りよ  
うとしてゐるのに氣がついた。

『何處へお前さんは行くかね。』

『家へ。』

『擱つたらどうするか？』

『私はこの仕事にかゝつてから幾らも経たないから、多分彼等奴は私を知つてゐます  
まい。よし、また、捉つたつて構ふものですか、みな禁錮にされると何時も伶俐にな  
るのですよ。』

突如、誰か遠方で大きな聲をして、こんなことを云つてゐるやうに思つた。

『どうしたんだ？ マドゥ！ お前さんは神を怖れないで、巡查を怖がるのか。』

イワンの方を見ると、そこに立つたまゝ、黙想して下を見てゐた。

『お前さんは今何にか云つたかね。』と自分は訊いた。

『私の今云つた意味は、人々は牢獄に這入ると、書物を澤山讀むと云ふことなんです。』  
『それだけ？』

『それで充分でないですか。』

一ツの秘密な虚偽が自分の心情の中に宿つてゐて、耻づべき疑問が燃ゆる火花のやうに起つて来た。冷かな夜であつたが、自分はむかむかした。

『自分も一緒に行かう。』と自分が云つた。

『いゝえ、そんなことをしては可けません。』とイワンは嚴格に云つた。『てないと、屹度掘ります、これもみんな、貴君の談話から起つたのです。』

『どうして？』

『教區の牧師がヴェクトルホトヴィーに密告けたのです。』

自分は地面に腰を下して云つた。

『では、眞箇に行つて了はなけりやならないね。』

でも、恐怖のために躊躇した。

『誰かやつて来ます。』とイワンが囁いた。

自分は瞰下した。闇黒な影が丘の上を走つて来る。天空はどんよりして、上弦の月は既に落ちかけてゐる。雲間から覗いたかと思ふと、直に見えなくなつた。全世界が動いてゐるやうに思はれ、その静かな運動が尙一層自分を不愉快にし、陰氣にした。自分は、その影が地上を動き、闇黒で自分の心靈を包んだ黒い面衣で、その邊りの叢林を蔽つてゐたのを見た。すると一つの頭が灌木の間から跳り出して来て、球のやうに漸次に近く飛んで来た。

イワンは徐かに口笛を吹いてゐたが、叫び出した。

『コスチアだ！』

自分はコスチアを知つてゐた。十五歳になる碧眼の美少年であつたが、特別に強壯

な方ではなかつた。二年許り前に學校を出て、學校の教師になりたがつてゐたから、ミクハイロは助手にする積りで仕込んでゐた。

自分は他事を考へて、羞恥や恐怖を隠さうと、故意に、かう云ふ細々したことに、氣を配つて居るのに、氣がついた。

コスタアは呼吸を切らして、叢林から躍り出して、言葉も断々に次のやうな報告を齎らした。

『彼等奴がやつて来た、出家、あなたを探してゐます、こゝにピーター小父さんから手紙があります、私にあなたをロバノヅの隠家まで案内しろと云ふことですから、さあ行きませう。』

自分は起き上つてイワンに云つた。

『君、御機嫌よう。みんなによろしく云つて、お詫びをしてくれ玉へ。』  
コスタアは自分の脇腹を衝いて、嚴めしい權威ある聲でかう云つた。

『ついでにお出なさい、誰に左様ならを云ふんですか。貴方は屹度雛鳥のやうに市場に伴れられて行くでせう。』

コスタアと自分は出發した。コスタアは前方を歩いて、低い聲で、工場で見つて来たことを自分に話して呉れた。自分は後方から跟いて行つた。目に見えない手が四方八方から、自分の袖を牽くやうで、誰かゝこんなやうなことを云つたやうに思はれた。

『貴様は何處へ行くんだ、人々を窮地に陥れて置きながら、砂煙をたて、行つて了ふのか……』

で、自分は聲高に自身に話すやうに云つた。

『みんなのものが貴様のために、こんな破目になつたんだ。』

少年は答へた——

『貴方のためではありません、真理の爲めです、貴方が真理なんてせう？ だつて、こんな生若い青二才！』

この少年の言葉は自分の耳を竦てさした。彼は年少ではあつたが、自分はその嘲弄を強く感じた。彼に自分を辯明しようとして、恰當乞徒が頭陀袋から貰ひ置ききの施物を取り出すやうに、自分の思想を曝露け出した。

『さうだ。』自分は云つた。『自分だつて随分虚偽のあるのは解りきつてゐるさ。』  
彼は何だか呟いてゐた。それが自分の良心の應答のやうに響いた。

『随分て、何うしてゐる、貴方には萬事が他の人よりか偉大なくなつてはならないんです。』

『誰か他の人から聞いたな。』と自分は考へた。

『コスチンが貴方を鐘樓だと云つたのは間違つてゐないんです、』と彼は云つた。『が、歪んで建てられ、間違つた時間を打つものは、他人の爲ではなく、それ自身の爲なので……』

この少年は少時、黙つてゐたが、突如にかう叫んだ。

『私は貴方が嫌ひです、貴方は知らない方です。』

『それなら、何だ？』

『よくは解りませんが……、貴方はロシア人ぢやないんでせう、ねえ、貴方は善い人なんです。』

他の場合なら、自分は激昂したかも知れないが、この時だけは黙つてゐた。突如自分分は弱つて、疲れきつて了つた。

四邊は夜と森とであつた。闇黒は樹木の間に漲り、樹幹までも見分けのつかぬ程であつた。月光が射込んで来て、暗黒が消え失せた。萬象は靜肅として、只足下にある木の枝がばち／＼と鳴り、乾いた枝がさらさらと戦いてゐるのみであつた。

この少年は眞理を語ることを怖れて居なかつた。長老ヨナシユを始め、凡てこれ等の人は、全然、恐怖を缺いてゐた。その中には餘程怒りつぱいものも、終始快活なものであるが、その多數は慎み深い靜かな氣質で、自身の善良な性格を示すことま

でも差ぢると云つたやうな人々であつた。

コスチアは前方に歩いて行つたが、その金色の髪が柔かに自分の行く道を照してゐた。自分は聖パソロミユイ、聖アレキシス其の他の聖者達の話を回想した。否、實はその何れにも當嵌らなかつた。——自分の思想は沼澤の鵞のやうに、此處彼處にかけ廻つてゐたから。

自分はこの少年にかう云つてみた。

『お前は聖者の傳説を読んだことがあるかね。』

『え、小さい時には。お母様が讀めつて云つて呉れました。どうしてそんなことをお訊きになりますか。』

『お前は神の聖徒が好きかね。』

『どうかかよく分りませぬね、パンテレーモンが好きでした、それから龍と戦つたと云ふ聖ジョージも。かう云ふ聖者を崇敬して人類にどんな利益があるのか分りませぬ。』

自分はコスチアの價値を認めた。

『國主の姫君、富豪の愛娘が、基督教に改宗し、その教に殉死しても、その國王なり富豪なりは、そのために少しも善良にならないんです。そのため國王がその生活を改めたと云ふ傳説を聞いたことがありません。』とコスチアは云つて又かう云つた。

『私には、キリストの難苦が何のためになつたか、實際解りません。成程、キリストは迫害に打ち勝ちました——然しその結果はどうでせう？』

彼は少時、沈思してから、かう附加した。

『何でもありません。』

自分はこの少年を抱き締めてやりたくなつた。自分はコスチアや、隠舎に残つてゐた人々は言ふ迄もなく、凡ての人類、自分にまでも深い同情を感じたから。自分の爲にどう云ふ場所があるのか。全體自分は何處に行くんであつたか。

『お前さんは疲れたらう。コスチア！』

『私が疲れたかつて?』とこの少年は快活に答へた。『いゝえ、私は徹宵、歩いてゐるのが好きなんです。仙郷へでも行くやうですもの、お伽噺が大好きなんです。』

夜明近くになつて、兩人は眠らうとして横になつた。コスタアは、恰當川にぶち込んだやうに、直に眠つて了つた。然し千々に亂るゝ思想は容易に自分を息まसानかつた。自分は恰當、寒空に教會の周圍に彷徨いてゐる韃靼人の乞徒のやうに思はれた。街道は肌を裂くやうに寒く暴風が吹き荒んでゐても韃靼の乞徒は豫言者の命令で、教會に入ることを禁じられてゐる。

朝になつて、自分は決心した。で、この少年が眼を醒した時、自分は彼に云つた。『何にもならぬことにお前について来て貰つて濟まなかつた。自分は隠舎に行くまいもう隠れまい。』

彼は四圍を見廻はして云つた。

『貴方はもう隠れて了つたんです。』

それから少年は自分の方を見ないで、一本の枝を振り廻はした。

『では、左様なら、ご機嫌よう。』

『さよなら。』と彼は首肯いて云つた。

自分はまた旅路に上つた。數歩行つて、振りかへつて見ると、少年は樹間に立つて自分を目送つてゐた。

『はあ!』と少年は叫んだ。『さよなら!』

自分はこの言葉を衷心から繰返へして呉れたことを嬉しく思つた。

## 二十七

數日間、自分は心の重い苦痛に沈んで居る病人のやうに歩き廻つた。種々な思想が自分の影と共に、自分の前に彷徨つて、鋭い刺戟性の煙のやうに付纏つた。その時自分には耻しく思つたかどうかは記憶して居ないから、何とも云ふことは出来ぬ。然し自

分の心中に暗黒な思想が起つて、それが云はゞ外面的に、黒い蝙蝠のやうに飛び廻つて居た。

『それは不信仰で、神を創造するものではない。』  
然し陰鬱な平靜——陰鬱な奈落に比較されるやうな懶い烈しい平和——が凡ての思

想よりももつと重く、もつと深く自分の心にあつた。その奥底に黙つて居た思想が驚かされた魚のやうに、光明を得やうとして徒に無駄骨を折り、疲れ苦しんで居た。

自分は外界から殆ど印象を受けなかつた。夢中に現はるゝ繪のやうに、人類と自分の交渉を想ひ廻らした。自分は何處かオムスク附近の或る宿場に達した。その時初めて夢から覺めたやうであつた。

盲目の老人が路傍の塵埃の中に坐つて歌を歌つて居た、盲人の案内者はその傍に跪いて風琴を伴奏してゐた。盲人は天空を仰いで、錆びた微かな聲で、古めかしい小謠を歌ふのであつた。

『頃はイワン皇帝の治世なりき……』

手風琴の音が懶るさうに云つた。

『ウー、ウー、ウー、』

自分は盲人の側に坐つた。盲人はその手を差出して、自分の手を握り、少時して後にそれを離してまた歌ひ續けた。

『イルマツクと云ふ剛勇な、コサツク人が住まひけり……』

『アー、アー、アー』と手風琴が繰返した。息を殺して黙想してゐた群集は、靜に奏樂者の周圍に集り、頭を垂れ、盲人の言葉に耳を傾けてゐた。

自分は恰當乾いた温い呼吸に取り圍まれたやうな氣がした。不思議な眼の光が自分に集つてゐるのを發見した。と、あるものが自分の方を指して云つた。

『あの人は歌はないかね。』

『お待ちよ、あとであの人も歌ふてせうよ。』

自分は其れまでに、山賊に關する歌は屢々聞いたが、歌の文句も其の中に吹込まれてある精神も知らなかつた。然しこの時自分は其の兩者を理解した。太古の人々は小謠によつて數千人の口を借りて自分に話しつゝあつたかのやうに思はれた。

『おゝ、予に犯した汝の大罪は、容して遣はすぞよ……予のために盡した汝の功績に免じて……』

群衆は愈々好奇心を以て自分を凝視め、自分の精神は活氣を帯びて來た。

盲人が小唄を了つた時、自分は起ち上り、群衆に對つて語つた。

『諸君！ 諸君は多數の人々を掠めたり、奪つたりした盜賊が、後悔して良心の苛責に會ひ、どうかして元の眞人間になつて、その心靈を救はれたために、人民の役に立つやうその勇氣と精力とを捧げたといふ小謠をお聽きであつた。彼は其の仕事を成し遂げました。それでも尙今日諸君は無慈悲にも掠奪を恣にする人々の中に、生活してゐられる。さういふものが諸君のため何の役に立ちますか。』

群衆が犇々と自分の周圍に押寄せて來た、聴衆の熱心な注意が自分の言語に力を増し、美と調和とを加へた。自分は自識を失ひ、その他凡てのものを忘れ、土地と人間との間に、深く根を下してゐるのを感じた。この人々が自分を價値以上にみあげた、彼等は沈黙の中に、自分に叫んだ。

『お話し下さい、さあお話しなさい。貴方が觀察された通り、全體の眞理を俺等に話して下さい。』

其の時查公が來て、『さつさと行くが可い。』と叫んで何事かと尋ね、自分の旅行券を請求した。群衆は、日光の下に消失せる雲のやうに靜に離散した。然し查公は自分の云つたことを探究しやうとした。

『彼の人は神……について話してゐました。』と誰か云つた。

『何んなことに就いて……』

『主に神様のことに就いて。』



黒い髭の男がじつと自分を見詰め、親しげに微笑して、その荷車の傍に凭つてゐた。查公が自分の襟首を捕へた、自分はそれを振り離さうとした。然し群集が流眄に見てゐるのに氣がついた。何だか彼等が、

『さて、お前は今何を云はんとするのか。』  
と云ふやうに。

群集の自分に對する不信は自分を萎縮させた。

自分は時機よく自らを抑へ、そして查公の手を推し退けて叫んだ。

『お前さんは自分の云つたことを知りたいですか。』

其の時自分は今一度現世の不正に就て議論し始めた。で、又彼等商人が自分の周圍に密集して來た。查公は一言も云はずに群集の中に消えて了つた。

自分はコスタアと其の工場に於ける自分の朋輩のことに就いて考へた。そして自ら自負と愉快を感じた。自分はまた強く感じて、夢のやうな生活をしてゐた。查公がそ

の口笛を鳴らした。と、眼前に多くの顔と輝く眼を見た。群集が暑い潮のやうに自分の周圍に推し寄せ、突進して來た。そして自分は彼等の中に安心してゐた。或る者が自分の肩を捕へて耳語いた。

『彼方へ行きなさい、彼方へ行きなさい！』

突然自分が庭の真中に現はれるまで、群衆は自分を押ししたり突いたりした。そして黒髭の人と帽子を被らない人とが自分の傍に立つてゐた。

『籬を超えて行け！』と髭の男が云つた。

自分はその籬と今一つの籬を超えた。そこでやつと安心した。然しその男が突き進んで云つた。

『急げ！ 急げ！』

自分は急ぎながら彼に云つた。

『お前さんは誰人です？』

『お前さんの味方の一人だ。』

帽子を被らない少年は、黙つて吾々について来た。吾々は花園を通り抜けて、下には小川が流れてゐる峡谷を攀ぢ上り、叢林について雁木形にうねくした道路に達した。髭の男は自分の手を握り、顔を覗き込むやうにして、笑つて云つた。

『よろしい、君には幸運な旅行です、さあ行きなさい、フレディアウクはよい道を案内するでせう。』

少年は髭の男に云つた――

『貴方自身に注意なさい、でないとな奴等は貴方を捕縛しますよ。』

髭の男は前方に腰を曲め、小山に這上りだした。それと同時に自分とフレディアウクは小川の流について行つた。

『あの人は誰?』と自分は尋ねた。

『政治上の犯罪の爲めに放逐された鍛冶屋さんです。』と彼は答へた。

『自分はあゝ云つたやうな人を多く知つてゐる。』と自分は云つた。

自分は大に元氣づいたが、フレディアウクは少しも口を利かなかつた。自分はこの少年を細に観察した。その圓い顔には、恰當石で造つたやうな獅子鼻と、凸出た灰色の眼が附着てゐた。少年は静な聲で語り、音のしないやうに――何かに耳を傾け、或は何か強い力に引上げられてゐたかのやうに――その首を伸ばして歩いてゐた。恰當自分の義父テイトヴがやつたやうに、背中に手を置いた。

『お前さんはその徒黨の一人かね。』

『私は教區僧の仕事をしてゐます。』

『お前さん、帽子をどうしましたの?』

少年は頭に手を置いて自分を眺めて云つた。

『どうしてそんなことをお尋になるんです。』

『もう夕方、直に寒くなるでせう?』

少年は少時黙つてゐたが、怒つてふつふつ云つた。

「頭さへあれば、帽子などは何うだつて可い！」

谿間がだんだん深くなり、小川の水音がだんだん高くなり、夜の幕が叢林の方からやつて来た。

自分の心は疑惑の餌食になつた、と同時に愉快を感じた。自分は少年と話して見なくなつた。

「お前さん達の中に、只一人でも悪徒があるかね。」と自分が尋ねた。

その時、この少年は忽ちに和いだ聲で語り始めた。

「四人ゐます——モスカウの貴族が一人、ドンの労働者が三人。その中の二人は沈着な人々で、焼酎を飲み、その貴族とラトコブは何時も機会があるごとに内密に話してゐます。今までの人等は公に話すことをしなかつたです。此處邊には此種のもものが澤山住つて居ます。私はブリスクから来ました。フェドル・ミテイコブは私の洗禮を

受けた時の名で、別名です。私は此處に来て殆ど五年になります。その間に、彼等やうな人間が十一人ゐました……」

少年はもつと多く彼等を数へ上げた、そして總數十六人に上り、暫らくこの事について考へた後、彼は話し續けた。

「その中には二三の百姓も居ますが、みんな同じやうなことを云つてゐます。彼等の生活は實に價値のない、辛抱し難いものです、さういふ話を聞く前に、私は全く平靜な生活をしてゐました。今私は成長して頭を下げなければなりません。で、自分を壓迫するものが實際に存在することを感ずるのです。」

少年には話すことが困難であつた。如何にもその言語は無理に引出されるやうに思はれた、肩の廣い壯健らしい彼は、自分を見ずに歩いた。

「お前さんは書物が讀めるかね。」と自分が尋ねた。

「私は忘れて了ひましたが、少し位は讀めます。今私は稽古してゐます。兎に角、ど

うにか讀めます。若しそれが必要ならばやれます。そしてそれは必要です。若し生活の壓迫について語る教師があつたなら、私はその讀書に多くの注意を拂はなかつたでせう。教師の意見は何時も吾々とは異つてゐます。然し吾々の同胞、可憐な労働者がそれに就て話し出す時、それは事實であります。それで多くの平凡な人間もモスカウの貴族よりは、もつと深いです、初めにそれは何か普遍的で人間的で、人々は何時も、普遍的とか人間的とか云ひます。さて私は人間だから、あの人達と同じ道に従はなければなりません、それは私の考へてゐる所のものです。』

少年の話聞いた時、自分は獨言つた。

『マドウ、何時も學問を忘れないやうにして居れ。』  
そして自分は彼に云つた。

『それは神の仕事だ。』

その時少年は驚いた、不意に立ち上り、自分の方に顔を向けて眞面目に云つた。

『それは全體神の仕事ですか、聖書に『爾の父を讀めた、へよ』とあります。有司もまた神から造られたと云はれて居る——これは奇蹟に依て證明されてあることです。若し古い法律が廢止されるなら、奇蹟は同様に求められなければなりません。然し何處に奇蹟がありますか。新らしき法律に左袒する奇蹟はないんです、一つもありません。凡てが舊い法律に於けると同じです。ニジニ・ノヅゴロトで、聖セラフィンの骨を縦覽しました。そして奇蹟が行はれたが骨は偽物でした。セラフィンの髭は白くて赤くはなかつたんです。髭の問題は兎も角、奇蹟ではなかつたんです。然し何か奇蹟があつた？ 確にありました。然し人々は奇蹟を許さなかつた。凡てその奇蹟を欺偽と考へたり、または「信仰は奇蹟を生ず」と云ひました。』

少年はまた足を止めた。夜の幕が土地から上つて彼を包んだ。道路が急に下り坂になつて、小川がだんだんと早く流れ、叢林が柔しく動いてさわさわと音がした。

自分は少年に囁いた。

『行かうではないか。』

少年は歩み出し眞黒の中を躓きもしないで歩いた。自分は絶えず彼の背中を打つた。少年は石のやうに轉がり、その不思議な言語が、夜の沈黙を破つた。

『私は同情といふものを知りません。軍人の兄がかりました。首を縊つて死にました、姉はハアクスで下婢になりました、そして主人の子供を産みましたが、それが鰐足で四歳になつても歩くことが出来ません。色々の男が姉を騙して、節操を破らしたんです。姉はどうなつたでせう？ 父は大酒家で、兄が一切の所有地を取つて了つたんです、て、私には何もありません。』

二人は濕つばい暗黒の中に叢林を通り過ぎた。小川は間もなく一度は森の深みに隠れたが、また足元にさわさわと音をたて、ゐた。頭上には夜鳥が静かに飛び、天高く星が輝いてゐた。自分は道路を急がうとあせつてゐたが、案内者たる少年は急がなかつた。少年は自身の思想を信じ、注意してそれを考へてでもゐるやうに絶えず呟いて

ゐた。

『ラトコブ黒ん坊は善良な人間です。彼は新しい法律によつて生活し、弱者を助けてゐる。監督が一度私を杖で撲つたので、ラトコブは直に彼を打ち伏せた。するとそのため十五日間の禁錮を受けた。それが二人の知合になつた始めだ。彼が牢屋から出た時、私はかういつた。お前さんは何うして有司に反対しますか？ その時彼はその主義を説明した。私は教區の坊主に言つた、すると坊主がかう云つた。『は、は、ではこれはお前さんの思想か？ 彼等はラトコブを町の牢屋に送り、そこに彼は三ヶ月間ゐた。私も十九日間牢屋に這入つた。役人はそこで私に云つた——「何を彼がお前に話したか？ 私に答へた、何も話さない」「何を彼はお前に教へたか？——「何も教へない。私も馬鹿ではないねえ、ラトコブが歸つて來た時、私は彼に云つた。『許して下さい、私が馬鹿であつた』彼は只笑つて、『我樂苦多！』と云ひました。』』

案内者は少時黙つて、それから聲を換へて云ひ續けた。

「彼の男には何も彼も「我樂苦多」です。若し彼が血を吐いても、たゞ「我樂苦多」と云つてゐます。彼が何も食べるものがない時でも「我樂苦多」なんです。」  
突然少年はいやしい呪を發し、自分の方に向いて、その齒の間からしつしつと云つてゐた。

「私には全く解らない、私の兄は自殺した、それは兵卒であつたからです、私の姉の經歷も普通あり觸れたことです、然し何故血を吐くまで此の男を苦めるのか、自分には解らない、私は此の男が行けといへば、何處へても犬のやうにその後をついて行く。此の男は私を「ローランド」と呼び、それを云ふ時には笑ふ。此の男が何時も苦められるのを見ると、私は刺されるやうな氣持がする。」

少年はまた泥酔つた坊主のやうに、賤しい方法で呟つた。  
豁谷は漸々廣くなり、その兩壁が廣がつて廣漠たる平原に出た、そして絶壁が暗黒の中に消え失せるまでに遠ざかつた。

「さよなら、ご機嫌よう。」と自分の案内者が云つた。

少年はミムスクに行く道路を自分に教へた。それから踵を返へして暗黒の中に消え失せた。自分は今先きに進むことが出来なかつた。

夜の手が地上を覆ひ隠した。天空には月もなければ星もなく、微風もなかつた。然し自分には喜ばしく香しく思はれた。

自分は道案内者の陰鬱な言語を心から取り去ることが出来なかつた。あの少年は自分には、土地の中に長く埋められ、尙ほ土で覆はれ鏽で腐り、それでもまだ、——隠氣ではあるが——ある珍しい調子で響く鐘のやうに思はれた。

自分の前に起つて自分の話に注意して耳を傾けてゐた村人等が心眼に映じた。査公から自分を保護した時の彼等の心配顔が自分の前に現はれた。

「それはかうであつた。」と自分は驚き考へた、そして自分がやつて來た凡てを實現することは難しいと覺つた。

その時、また自分は考へた。

『この少年は奇蹟を熱望してゐる、そしてまた彼れ自身は生きた不可思議物である——自身の生活に恐怖してゐるに係らず、その憐人に對する愛を持つてゐるから。自分の話に耳を傾けてゐた群集までも不可思議物だ——それは、長い間、それを聳と盲目にしやうと烈しく企てられてあつたが、それでもまだ聳にも盲目にもなつてゐないから。然し尙一層偉大な不可思議物はミクハイロとその仲間だ。』

自分の思想は、平穩に、すらすらと流れた、さういふことは自分には、思ひ掛けない珍しいことであつた。不安と不定の疑惑とを發見しようとして考へて、注意して自らを吟味し、靜に精神を探つて見た、自分は沈黙せる暗黒の中に微笑んだ、そしてそれに依て自分が嘗て感ぜざりし愉快を、心から斥けるのを怖れて、その場所を動くことを躊躇した。自分は豫期せざりし掘出物であつた心靈の不思議なる充實を信じた、ても信ずることが出来ない程であつた。

それは恰當自分の知らない間に、不思議な白い鳥が長く自分の心靈の黄昏の中に眠り、意外にも軽くその翼に觸れた時、目を醒して朝の歌を歌つたやうであつた。自分は心の中にその柔しい羽撃を感じ、そして自分の不信の氷がその熱烈な歌の下に溶解感謝の涙に變じて了つた。自分は聲高く話し、元氣をつけて歩き歌でも歌ひたいと思つた。そしてまた人間に出會つて、兄弟としてそれを抱きしめたいと思つた。

自分はいま一度教父ヨナシユの輝く顔容、ミクハイロの親切な眼容、コスチアの苦笑などを見た。凡てこの愛すべき親密なそして新しい知己が再び自分の胸中に集つて自分の幸福が激しい苦痛を感じるまで、其處に手足を伸ばしてゐた。

かうして以前、更生祭の朝の法會に、屢々自分は自身と凡ての人類を愛したこともあつた。

自分は其處に戦きながら考へて坐つてゐた。

『お、神さま、あなたは、つまり、私の神さまではありませぬか。あなたは、美中の

美、私の歡喜と幸福ではありませぬか。」

暗黒が自分を包んだ。その中に車座をしてゐる信者達の顔を見た、そして自分の心は絶えず歌つた。自分は土地を愛撫し、柔しく手の掌で打つた、それが恰當自分の愛馬であつて愛情を感じ得るかのやうに。

自分は最早や其處に坐ることが出来なかつた。起ち上つて暗夜の中を歩いた、コスチアの言語を考へ、自分はその子供らしい嚴格な凝視を眼前に浮べて、深い喜悅に酔つて歩んだ。自分は秋の末まで流浪を續け、その裕かな新しい天惠物を心靈の中に蓄へた。

自分はオムスクの停車場で、小露西亞の出稼人を見た。世界の大部分はこの労働者階級の血と汗で浸されてゐる。自分はその人々の中に行き、そのひそひそ話に耳を傾けて云つた。

『お前さんはこんな遠方に来て、困るやうなことはないかね。』

その中の一人——労働で頭髮が白くなり腰の曲つた男——が答へた。

『若し俺等は足下に少しの土地があるなら、距離なんざ構やしない。世界は實に狭い、俺等のやうに働いて生活するものには、ア、實に狭い。』

以前には缺乏とか悲哀とかいふやうな言話は、自分の心に灰のやうに墮ちたものだ。が、今はそれ等の言語は、突然の火花のやうに自分の心を動かした——今では人々の苦痛は自分にも苦痛であり、人々を苦しめる自由の缺乏は同様に自分を壓迫するのであるから。

人類には智的發展の餘地と時間がない。そして人類の中で智的に進んでゐる人々は、直に苦痛であり、危険である——それは只一人進んでゐるから。人々はその人を認めることが出来ず、人々の力で彼を擁護することが出来ぬ。そして孤獨の爲めその人の光は、それ自身の慾望の火の中に無益に消えて了ふ。

自分は小露西亞人と話した。その丁寧な國訛が氣に入つた。



「數百年間この人々は世界の表面を彼處此處と漂ひ廻つた、つまり價値ある生活を得んが爲に彼等の力を自由に發展せしめ得る場所を求めたのであつた。數百年間、世界の正しき主なる諸君は、世界の上を彼處此處と漂つた。何故かう云ふやうだか、誰が民衆——世界の主——からその玉座を奪ひ取つたか。誰がその人々の頭から王冠を奪ひ、一方から一方に、その人々——凡てのものを削つた強い力あるもの、地上にあらゆる美を植ゑつけた美術的な園藝者——を逐ひやつたか。」

その人々の眼は輝き、覺醒した人間の心靈がそれから閃いた。そして自分の瞥見までも鋭敏になり、先見の明を得た。自分は疑問の現はれてゐる顔を見ると、直にそれに答へた。自分は疑惑に出會ふて、それと戦つた。諸君は眼前に開かれた多くの心から力を引き抜き、その力によつて、それ等凡ての心を統一して只一つの心にするのである。

諸君が人々に話し掛け、凡ての眞實な人間に普通にあり、各人の心靈の眞奥に潜ん

である何ものかについて語る時、輻射の力が人々の眼から發して、諸君に浸み込み、そして群衆以上のものにする。然しかくして諸君に起るものが諸君自身の意志であると思像してはならぬ。諸君はかう云ふ瞬間に、人々から與へられた力によつてのみ強い。群衆が解散する時に、その精神は發散して、諸君は再び他のものと同じ一人になるのである。

かういふ方法で自分の愼深い福音を説き始めた。——然し自分は新しい神を知らず、只新しい生活の名によつて、新しい宗教に人類を呼んだ。

ツラツウストで、ある祭日に、自分は市場で群衆に演説し始めた。するとまた査公に妨害された。自分は追跡されたが、人民はまたも自分を隠した。

その時自分は或る有名な人々と相識になつた、その一人はヤシヤ・ウラデイキンと云つて神學の研究者であつた。今も尙自分の親友であるが、恐らくは自分の一生の間は繼續するであらう。その人は神を信せぬ、それでも、何ものよりも教會の音楽を愛

し、それに感動されて泣くことさへある、そして小風琴に伴せて詩篇の歌を歌ふ時に泣く。かういつた愛らしい妙な男だ。

自分は彼に言つた。

『君は異端者だ！ 君は無神論者だ！ 何故哭くのでせう？』  
而してこの憐れな男は慄へながら答へた。

『私には創造されんとしつゝある、凡ての光榮ある美しいもの、豫覺があるのて、眞に愉快で泣いてゐる。若し此の汚れた轉倒した生活の中に、それ程多くの美が個々の弱い力に依つて生ぜられるものとしたなら、精神的に解放された全世界が讚美歌や音楽で、その強大な心靈の充分な熱情を表はす時には地上に何が創造されるか。』

その時この男は、自ら觀じた光榮ある未來に就て語り始めた。そして自ら話した物語に驚かされてゐた。自分はミクハイロに對する程に此の友に多くの感謝をしなければならなかつた。

自分は十二人の秀てた人を見た。一人は何時も町から町へ他の人の所に自分を送つた。自分は云はゞ、或る燈臺から他の燈臺へ行つた。そして凡てが同じ信條の焰によつて燃やされてゐた。凡て此等の人々の異つた性格を述べることも、凡ての精神上の統一を見て、彼等の愉快を言ひ表すことも、自分には不可能なことである。これ等露西亞民衆は偉大である、そして生は云ひ難き美である。

## 二十八

自分が最後の打撃を経験したのは、カザンの地方であつた。その打撃は殿堂の建築を完成させた。

それはセミオザナにある隱者の庵で、聖母の神變不思議な繪の禮拜行列であつた。それは町から僧院に此の繪を還納する嚴肅な行列であつた。

自分は湖水の邊りにある小丘に起つて、人々の群り集つてゐる附近の地方を眺めた。

群集が黒い波をなして、僧院の門の方に流れ込み、壁に突き當つて、はね飛ばされてゐた。没せんとしつゝある太陽の秋の光線が、眞紅に輝いてゐた。鐘は歌を後に残して飛び去らんとする鳥のやうに震へた。そして淡紅の頭は太陽の光線の中に、薔薇色の罌粟のやうに、あらゆる方向に輝いてゐた。

群集は僧院の門前で奇蹟の現はれるのを待つてゐた。小さな車の中に、一人の少女が静に横になつてゐた、その顔容は白蠟のやうに、感覺を失ひ、その灰色の眼は半ば開き、長い睫毛の微に動くのが、その生きてゐるといふたつた一つの標象であつた。少女の傍には両親が起つてゐた。父親は背の高い、頭の禿げた、灰色の髭で、大きな鼻の男であつた。母親は丸顔の肥つた女で弓形の眉毛の下に、兩眼が大きく開いてゐた。彼女は指をわなわなと慄はし娘の前方を見詰めてゐた。そしていつ何時、苦痛に充ちた突き通すやうな叫喊を發するかも知れないやうに見えた。群衆が近寄つて病める少女の顔容を凝と視た、その父は髭を慄はしながら云つた。

『憐みを垂れて下さい、四年の間娘は手足が利きませぬ、娘を救ふために聖母マリアにお願ひ下さい、神は信心深き貴方達の祈禱に、報ひ下さるでせう。何うかこの悲歎より救はるゝやうに、この娘の兩親をお助け下さい。』

父は彼處此處の僧院に此の娘を伴れ歩いてゐるが、全治の希望がないと云ふことは明かであつた。けれども、彼は絶えず同じ言語を反覆するのであつた。してその言語がその唇から勢なく響いた。人々は彼の祈禱を聴き、十字を切つて歎息した。と、同時に、この娘の睫毛はその苦しげな兩眼の上に、びくびくと動いてゐた。

自分は今これまでにかういふやうに苦しんでゐる二十人の少女、幾十人の癲癩病者、その他いろいろの病人を見た、然しかういふ人間を見ると、何時も厭な感じがした。自分は薄命者共が無益に奇蹟を豫期してゐるのに同情した。然し自分の同情はこの時程強いことはなかつた。

偉大な語らぬ悲歎が、この娘の白い死骸のやうな容貌に書かれ、無言の悲痛が娘の

母親に取りついてゐた。自分は心から悲み、其處を立ち去つた、それでも尙ほその親子を忘れることが出来なかつた。

数千の眼が、遠くまで見詰め、自分の周圍に聲高く響き渡る耳語が、雲のやうに漂つて來た。

『やあ！持つて來る、持つて來る!!』

徐々と苦しうに、海の黒い濤のやうに、行列が山の上に進んで行つた。旗の金が輝く泡沫の深紅な火花の束のやうに、山の上に翻つてゐた。そして徐々と火の鳥のやうに、日光に輝く聖母マリアの、繪が動き漂つてゐた。

数千の口から出た讚美歌が、力強い太息のやうに、群衆から起つた。

『お、恩恵裕なる擁護者、聖母!』

噎れた叫喚が讚美歌を妨げた。

『前へ、もつと早く、もつと早く!』

淺藍色の森に包まれた輝く湖水が微笑んでゐた。輝く日光が森の後ろに没した、鐘の強い音が遠方に愉快げに鳴り響いてゐた。然し自分の周圍にある凡ては、只、囊れた顔、涙で覆はれた眼、微かな悲しい祈禱の私語、十字を切る数千の人民であつた。自分は淋しく感じた。凡てこれが自分には單に悼ましい力なき失望に充たされた謬見で、與へらるべき恩恵を、徒に待つてゐるやうに思はれた。

群衆が近寄つた。何の顔も塵で覆はれ、汗が頬から滴つて居た。彼等は重々しく呼吸し、何も見えないやうに、不可思議に見詰めた。人々は相互に衝き合つて、踰越してゐた。自分は彼等のために、基礎なきその熱烈の信仰を悲しんだ。

行列は際限なく見えた。  
強い叫聲——高く興奮した、然も同時に、悲しげな、叱責に充ちた——が反響してゐた。

『喜へ、喜へ！ 裕かなる恩恵を!』

そしてまた聞えた。

『前へ進め、もつと早く、もつと早く進め！』

塵の雲の中に、自分は數百の暗黒になつた顔と、天漢の中の星のやうな數百の眼を見た。此等凡ての眼は、單一なる心靈の赤熱の閃光のやうに、ある未知の愉快を熱心に待つてゐた。

人々はたつた一つの身體のやうに進んだ、相互にくつつき合つて、手を取り、餘程遠方にでも旅行するやうに早く歩いた。そして彼等は直にさうするやうに用意してゐた。障碍さへなければ、地球の極地までも。

自分の心臓は理解することの出来ない心配で、激しく鼓動した。電光のやうに、教父ヨナツシユの美しい語が自分の記憶に浮んだ。

『民衆、神を創る人々。』

その時自分は前へ急ぎ、群衆の中に突き進んだ。一直線に山を下りて、群衆の中に

混り一緒に進み、あらん限りの聲をはり上げて歌つた。

『喜べ、凡ての力の中の仁恵ある力を！』

群衆が自分を捉へて、曳張つて行つた。そして自分はその暑苦しい呼吸の流れの中を泳いだ。

自分の足は土地にくつついてゐなかつた、自分と云ふものがなかつた。時間までも最早やなかつた。然し只愉快——天空のやうに無限な愉快があつた。自分は信仰の熱火で輝く石炭であつた。自分は無意義であり、且つ偉大であつた、みんなのものが飛んでゆくその瞬間に、自分を包圍する此れ等凡ての人々と同じやうに。

『進め、急げ！』

混亂を極めた人々は、凡ての障碍と深い淵、あらゆる攪亂と陰鬱な恐怖に打勝つやうな勢で、土地の上を飛んで行つた。

突然彼等の凡てが自分の周圍に立ち止り、大混雜が引起つた、そして直に自分は、

病める娘の車の近くにゐるのに気がついた。群集が叫んで狂ひ廻つた。

『哀願の祈禱、哀願の祈禱！』

偉大な興奮が人々を捉えた。その車が變つた方向に突き進んだ。少女の頭がぐらつき、その大きな眼は恐怖に充たされてゐた。多くの眼が病者の上に輝いた。數百の力が彼女の弱い身體を覆ふた。——力は少女が寢臺から起ち得るために、祈禱で召び集められたものである。自分はまた彼女の眼の底を覗込んだ、そして自分は他のものと同じく、偏に少女の病氣全快を熱望した。然しそれは自分の爲めでもなく、また彼女のためでもなく、全く異つた偉大なものゝために熱望した。それに比較すると、少女と自分は大火の焰の中にある軽い羽に過ぎなかつた。

雨がその恩恵ある水氣で、土地を濕ほすやうに、人々は彼等自身の方で、少女のひからびた身體を浸し、彼女と自分に囁いた。

『起ち上れ、起ち上れ、娘！ お前の手をあげ、恐れるな、然し起ち上れ、恐れない

で起ち上れ、娘！』

無数の星が娘の心靈に起つた。蔷薇色の影が、その灰色の顔に輝いた。その兩眼は喜ばしい驚嘆で廣く開いた。その時、徐かに少女は肩を動かして柔順にその慄へてる腕を上げ、柔順にそれを前へ擴げた。少女の口は始めて巢を離れた雛鳥の口のやうに開られた。その時群衆の中から、恰當大地が眞鍮製の鐘でもあつて、巨人スツイエトゴアがその力の限りにそれを鳴らしたと云つたやうな叫聲が起つた。群衆は戦慄して後に倒れ、相互に叫んだ。

『起ち上れ、彼女を助けよ、娘！ 立ち上れ！』

自分等は少女を捉へて助け上げ、地上に立たせて柔しく支へてゐた。少女は風の吹く時の穀物の耳のやうに前に曲つて叫んだ。

『私の同胞！ 神よ、聖母マリアよ、私の親愛する同胞！』

『歩け！』と群衆が叫んだ。『歩け！』

少女の顔は汗と涙とで浸つてゐた。然し涙の覆面により少女の不思議な力が存分に閃いてゐた。少女自身の力の中にある信仰、それが奇蹟を生ずるのだ。

その少女は自分等の間を徐々と歩いた。そして蘇生した身體は確乎と群集に凭れてゐた。純白な花のやうに白き少女は微笑んで云つた。

『行かして下さい、私は自分で歩くことが出来ます。』

病める少女は立止つて、蹠跟して、それから歩いた。少女は刀身の上をても渡るかのやうに歩いた。然し助けなくして歩いた。少女は羞耻さうに、小さな子供のやうに笑つた。その周圍にある人々も、少女が子供でもあるやうに、親切にやさしくした。少女は興奮して慄へ、その腕をさし出して、人々の力で出来た空氣でそれ自身を支へようとした。無数の輝く光線は凡ての方面から彼女を支へた。

自分は僧院の門口の處で少女を見失つた。それから引起つた種々の事柄を彼是れと冥想し始めた。自分は周圍を眺め廻はした。凡ての方面に歡喜があつた。——鐘の音、

多くの人の口から出る陽氣な唸聲、天空に輝く落日の光、その反射で紫に彩られた湖水!!

一人の男が自分の所にやつて来て、微笑して云つた。

『お前さんはあれを見ましたか。』

自分は久し振りに遭つた兄弟のやうに彼に抱きついて接吻した。然し二人は何も云ふ言葉を見付からなかつた。只微笑で別れた。

その夜自分は一人でまた湖水の傍の森の中で過ごした。それでも、民衆——世界の主宰者、奇蹟を行ふ者——に、精神的の綱で始終固く結びつけられてあつた。

自分は耳を澄まして其處に坐つてゐた。嘗て見聞したものが、悉く自分の心中に開展し、一つの火の中に燃えてゐた。同時に自分はまた世界中にこの火を反射させた。そして世界中の凡てが莊嚴に輝き、不可思議な衣を纏ひ、嘗て全世界が自分を吸収し

たと恰當同じやうに、全世界を吸収せんとする燃ゆるやうな希望を、自分の心靈に與へた。

自分は一人て暗黒の中に自分の愛でもつて、全世界を抱擁したその夜の恍惚と、法悦を述べることが出来ぬ。

その時自分は經驗の絶頂に立つて、此の世界をば一つの力の中に凡てのものを統一しようとして努力する生きた力の燃ゆる流れと見た、その力が果してどうなるかは知ることが出来なかつた。

然し、自分は、その目的の分らないことが、無限の心智發展と、大なる浮世の快樂の基であつて、この無限の中に人間の生きた心靈のために自由な幸福があることを認めて喜んだ。

朝になると、また太陽が自分に、他の光景を示した。自分は太陽の光線が如何に注意深く柔しく暗黒の上に落ちて、それを散じたか、またどうして太陽の光線が地上か

ら、夜の幕を引き去つたかを注目した。地球は豊かな華美な秋の衣をつけて自分の前に現はれた、それは人間の偉大なる計畫のための——その計畫の自由を得んとする戦ひのための——碧玉の野原、美と真との祭日に巡禮する神聖の場處。

自分は無限の天空に、大洋のやうな眼で傲慢に眺め下す群星の間にある空間に、彼女——自分の母——を見た。自分は何時も赤く沸騰してゐる人間の生血で充たされてゐる鉢のやうな彼女を見た。そして自分は彼女の主人、偉大不朽の民衆を見た。

民衆はその偉大なる行爲と熱望によつて、彼女の生命に元氣をつけた。その時自分は祈禱を始めた。

『爾は自分の神である、貴き民衆よ、そして爾は祈願の勞苦と苦難とで、その美しき精神から造つた凡ての神の創造者である。』

『そしてこの世界には爾民衆の外に神はないのである、爾は奇蹟を行ふ唯一の神であるから。』



「これは自分の懺悔と信仰である。」

かくして自分は今、人々が暗黒と迷信との束縛から、同胞の心霊を自由にする場處に歸つた。そこに人々は合一した力として民衆を集め、彼等に隠れたる自我を教へ、彼等を助けて、その意志の力を認め得るやうにし、宇宙のために最上の神性を創造する大業に、凡ての人々を結合せしむる唯一の眞道を彼等に指示した。

——懺悔了——

大正三年六月十八日印刷  
大正三年六月二十日發行

懺悔  
定價金壹圓四拾錢



譯述者 勝屋英造  
發行者 阿部幸作  
印刷者 高橋郁  
印刷所 東京市京橋區弓町二十四番地  
三協印刷株式會社

發行所

東京市本郷區本郷四丁目八番地  
有朋館

電話下谷八一六  
振替口座一四五三二

# 復活の曙光

文學博士 姉崎正治著 ● 四六判四百八十餘頁 ● 定價金拾錢

●物質文明、形式教育の爲め殺されたる靈は、何れの時如何にして復活すべきか。復活の曙光は現はれたり。光を望む人は請ふ凝視せよ。この聲に應じて世間は如何に反響したるかその光り如何に世の暗を破りたるか。干戈の黒雲にも蔽はれざりし曙光が一段の光彩を添へたるを見られよ。

# 現身佛と法身佛

文學博士 姉崎正治著 ● 菊判三百餘頁 ● 定價金壹圓

●著者が東西の碩學に就き、歐洲日本の圖書館を叩き五天竺を踏破し、而して之を貫くに信仰問題の一點を以てして、前半生の力を盡せし結果この一書に縮寫せり。書中一方は流麗の行文を以て信仰と歴史との内奥を發揮叙説し、他方之に對してはあらゆる佛典の史料を原語にて参照せり。求道の士も研究の人も各この書中にその寶珠を拾ふを得べし。

# 最新神經衰弱自療法

醫學博士 佐野彪太校閱 ● 菊判二百五十餘頁 ● 定價七拾五錢 ● 郵税金八錢

●現代の學生及教育ある人士の最も苦しむ病患は神經衰弱症で而も其治療法は専門家すら最も難しとする所である著者多年の經驗により最新の學理を應用し斯病の原因より説き起し、其自療法に及び記事正確説明平易精密なれば神經衰弱症患者に對して天來の福音である。

# 六韜三略講話

太公望遺著 ● 大浦兼武題辭 ● 菊判クローリス ● 三宅雪嶺序 ● 泥牛居士著 ● 上製三百五十頁 ● 定價金九拾五錢 ● 郵税金八錢

●處世の術成功の秘訣奈何 ● 如何にして人物を鑑識するか ● 如何にして人を使用するか ● 如何にして衆人の長たるか ● 何を以て人の裏面を観るや ● 何を以て人を離間するか ● 人望を得信用を博するには如何 ● 財寶を儲るは如何 ● 如何にして敵に勝つか ● 如何にして天下を取るか ● 本書は如上の疑問を解決して餘蘊なき空前の快著 ● 昔し醍醐天皇沙金五萬兩を投じて漸く求め賜へる珍書なり

# 歌集 青海波

與謝野晶子著 ● 中判二百餘頁 天金付 ● 定價金壹圓

●歌集青海波は昨秋以來女史が新作歌中の優秀を集めたるもの嘗て上田文學博士女史の歌を評して曰く「古の紫式部、清少納言等はものは新古今集中の女詩人、かの俊成が女に比して優ることも劣る事が無い」と、以て本書の價值を知るべし。

# 懺悔

# 懺悔

露國ゴリッキイ原著 ● 中判五百頁餘 ● 價一、四〇〇 ● 日本河原英造譯 ● 箱入美本 ● 郵税金八錢

●ゴリッキイが露國現存の大文豪なることは喋々を要せぬ。彼は普通の文士とは違つて居る。彼がなした奮闘と努力とは文壇に名を成さんと云ふよりも寧ろ社會上の地位及び自由を得んが爲めであつた。殊に此「告白」の一篇は彼が近時に於ける一大傑作で、評家が等しく「ゴリッキイの復活」として歓迎する所のものである。

(最新) 式強肺の秘訣

醫學博士永井潜序  
フクトル竹中繁次郎著

○菊判美本二百五十頁  
○定價金七十五錢  
○郵送料不要

○専門大家竹中先生多年獨逸に於て研究せるの結果即ち此の書を成したり。本書の眞價今茲に贅言を要せず。肺を憂ふる者既に患されつゝある者一度本書を繙かば再生の光明に浴することを得べし

(華山文章)

茅原廉太郎著

中判五百餘頁 箱入美本  
定價金八十錢 郵税金八錢

○華山文章は地上の哀音怨語を天上に聽くものにして最も能く現代日本國民大衆の思想を代表するものなり。其第一篇歸來文章は先生が歸朝以來國民大衆の爲めに瀧ぎし血と涙との結晶したるもの。之に附する反響録は天下の讀者が先生に應じて叫喚せる痛切なる告訴状なり、別々東北文章。信濃文章。前東文章。人物評論。海外文章を以てす。天下の題目自然となく兩性とな



終

